

ブダペスト●盛田常夫

社会的エリートの動向

夏は野外のオペラやコンサートと決まっているヨーロッパですが、今夏の音楽行事は充実していました。オペラハウスに冷房装置が取り付けられたことで、シーズンオフにもかかわらず、Budapest と名付けた記念のオペラ、バレエ・ガラなど8日間の音楽の夕べが企画されたのです。今回は30年ぶりにキエフ・バレエ団のブダペスト公演が実現し、キエフで見損ねたバレエをブダペストで鑑賞することができたというわけです。

オペラはトスカとトラヴィアータ、ガラ・コンサートの方はヴェルディとプッチーニ、モーツァルトとワーグナーの組み合わせでそれぞれ2晩ずつの公演でした。プッチーニのとくに東洋物を扱ったものは、繋ぎの旋律が継ぎ接ぎの細切れのように聞こえ、たいへん耳障りで好きではありません。「ボエーム」はまだ良いとして、「トスカ」にしても、音楽に台詞が乗るのではなく、語りに音を付けたようでとても好きにはなりません。ガラで個別のアリアを聞いてみると、また違った趣があり、これは新しい発見でした。

これにひきかえ、野外のオペラ「真珠取り」(ビゼー)はさっぱりでした。舞台が狭い上に、マイクを通した音楽はどうにもなりません。夏の野外は客層もかなり違いますから、やはりスペクタクルなオペラで、音楽よりは舞台を見せるのが良いので

しょう。

もう一つの収穫はマルトン・エーヴァのコンサートでした。一昨年でしたでしょうか、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場の日本公演に際して、小沢征爾氏がサロメに指名したプリマドンナです。マルトンはドイツに定住し、年に数回、ブダペストに里帰りますのですが、今回は小林研一郎氏が音楽監督をしている国立フィルハーモニーの基金設立記念コンサートに友情出演でした。「ジークフリート」、「神々のたそがれ」のそれぞれ第3幕の演奏で、ブリュンヒルデを歌いました。彼女のCDを聞いたことはあるのですが、ライブはこれが最初です。パワーのある歌手ですから、アベマリアを歌うより、ワーグナーを歌う方がどれほど適しているか、良く納得した次第です。

ワーグナーだとマルトンでも、若干の空席が出ます。夏の終わりの行事で、あまり宣伝されていなかったにしては、9分の入りで上々といえるでしょうが、なにせいちばん高い席で1000円もしないのですから、収入はたかが知れています。小林さんがいらっしやらなかったのは残念でした。

音楽家に限らず、スポーツ選手、学者の世界では、国際的に活躍できる人材は海外に流れていきます。これはハンガリーの宿命のようなもの

で、ハンガリー人ノーベル賞受賞者のうち、本国で受賞したのは1人だけで、後は皆、外国へ移住してからの受賞です。今でも、その傾向には変化はありません。

コルナイの場合は、ハンガリーに住居を保持しながら、ハーバード大学のフェローをもっているというまれな事例です。最近、カリフォルニア大学のロシア・東欧研究センター所長に就任した経済史家のベレンド・T・イヴァンは、91年にハンガリーからアメリカに住居を移してしまいました。彼の個人的な事情もあったのですが。

●社会的エリートの調査

現カリフォルニア大学教授のセレーニイ・イヴァンは70年代後半に思想的な理由でアメリカに亡命した社会学者で、日本でも『知識人と権力』(水曜社、1986年)の翻訳があります。その彼が今、ロシア、チェコ、スロバキア、ブルガリア、ハンガリーの社会的エリートの動向を調査しています。いわゆる体制転換によって、社会的エリート層にどのような変化が起きているかという調査です。

本当の一握りのエリートは海外で活躍しているわけですが、国内のなかで権力を中心とするヒエラルキーのなかで、政治家、官僚、実業家、学者、労働運動家、社会活動家とし

て社会に影響力を行使できる人材の構成がどれほど変化したのか、それらの層が旧体制下と現在でどれほどの変化を示しているのかを調べるものです。

一つの仮説として、「旧ソ連・東欧のエリート層には本質的な人的変化は生じていない」という見方があります。これまで実証的な調査はなされていませんが、ロシアやルーマニアの政治舞台をみる限り、昔も今も同じ人たちが立場を変えて闘っているだけではないかという冷めた見解がかなり流布しています。

ポーランドにしても、「連帯」のリーダーたちは80年代後半には在野の権力のエリートを構成していたわけですから、やはり俳優は同じで配役だけが変まっているという印象を免れません。また、党・政府の官僚機構から抜けてた人々が、「民営化」された企業の経営者として、やはり指導的なポストに就いていることも周知の事実です。これらの事実は直観的に仮説を支持しているようにみえます。

はたして、こうした直観的な印象が正確に現実を反映しているものか、それともそれは表面的な現象で実際にはかなりの人的な変動が起きているのかを明らかにしようというのが、セレーニたちの調査なのです。調査そのものはまだ終了していませんが、ハンガリーを除いて、これから始まるような初期の段階ですが、ハンガリー調査の「中間報告」を紹介して、仮説の真偽を考えてみましょう。

●新旧エリート動向

セレーニのハンガリー調査では、旧体制のエリート3500人（1988年現在で抽出された）から1000名を無作

為抽出し、他方で現在のエリートとして政治・文化の指導者1500名から400名、6000名の企業経営者から600名の計1000名を抽出し、合わせて2000名のインタビューを取ることになっています。すでに1200名のインタビューが終了しており、そこから一定の傾向が浮かび上がっているようです。

まず、エリートの年齢構成ですが、旧体制のエリートのうち、1993年に60歳以上の年齢に達したものが3分の1を占めるのにたいし、新体制の政治家で60歳以上の割合は20%、経営者のうちで60歳以上の割合は5%、50歳以下が61%というデータが得られています。このデータに関する限り、政治・経済の分野の若返りが進行中という結論が得られます。

さらに、注目すべきは、少なくともハンガリーでは旧体制の政治家の年金生活への引退が一般的になっており、1993年現在で旧政治家の3割が年金生活者になっている点です。政治に関する限り、ハンガリーでは役者の交代が起きているといえるでしょう。

政治分野にたいして、経済分野の動向はかなり異なるようです。現在の経営者の8割は1988年においても会社の指導的な地位にあったという結果がでています。そして、この経営者のうち、1988年当時に民間経営者であったものがわずか5%という数字です。つまり、新しい企業家層のウェイトは高くないというのが、調査結果が意味するところです。民間からのたたき上げの経営者は思ったほど多くないのです。

さらに興味深いのは、現在の経営者の6割は1988年当時、ハンガリー社会主義労働者党の党員だったというデータです。目先の効く党員が、

いち早く党を離れて、新たな体制のもとで経済エリートとして生き残る道を選んだということでしょう。この傾向はたぶん、他の諸国にも一般的に見られる現象と考えて間違いなんでしょう。

社会主義労働者党の最後の指導者の一人で、ベルリンの壁を崩す決定を売り物に、ヨーロッパ復興開発銀行（EBRD）の副総裁になった旧体制最後の首相ネーメットは、こうしたエリートの典型例といえます。ネーメットに習ったわけではないでしょうが、この政権の副首相のメジェシはフランスとの合併銀行の副頭取になっていますし、計画庁長官だったケメネシュはイギリスのコンサルティング会社の社長になっていますから、能力のある政治家、官僚は経済分野で新たな道を拓いているといえましょう。

その意味で、経済の分野のエリートには本質的な変化はないという仮説は真だといえるのですが、政治の分野に関しては主役の交代が生じ、社会環境が変化しているだけに、少なくともハンガリーに関していえば、エリートの交代が生じているといえます。

こうした社会的エリートの動向の国際比較は、社会の変化を見る上でたいへん興味深い調査です。ハンガリー以東の地域では、政治分野でも経済分野でも、エリートの本質的な変化が起きていないという直観が働きますが、最終的な判断にはセレーニの調査結果を待つ必要があるでしょう。 [1993年9月15日] (もりた・つねお/野村総合研究所研究顧問・ブダペスト経済大学客員教授)